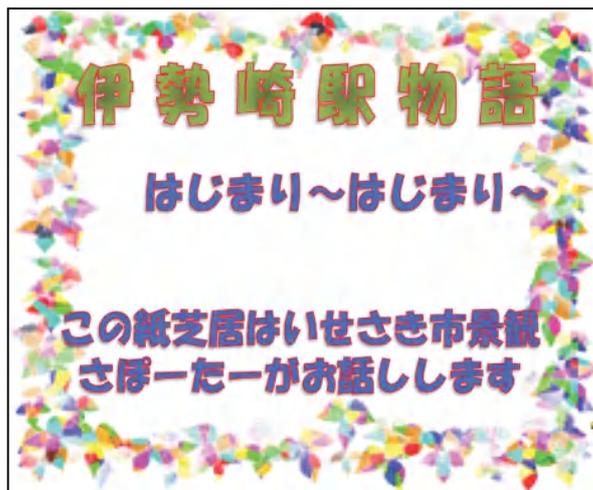


『伊勢崎駅物語 両毛線とともに』

はじめに



第1幕



伊勢崎駅は市の玄関です みんな知っていましたか？さて、伊勢崎駅がある両毛線は明治23年に開通しました。両毛線が開通してから、もう百二十年以上もたちました。そのあいだに、伊勢崎市も駅も大きくかわってきました。これから駅で、どんな事があったか、そして駅と私達が、どのようにかかわってきたか振り返りえってみましょう。

第2幕



【赤石君】「ひまわりちゃん、江戸時代や明治時代のはじめ、重い荷物を遠くへ運ぶため舟をつかっていたんだって。」

【ひまわり】「そうだね赤石君、手でこいだり、帆に風を受けて進むあの船が使われていたんだって」当時の伊勢崎にも、利根川や広瀬川に船の駅があり、荷物を積んだ船が江戸と伊勢崎の間を行ったり来たりしていました。でも、船は、沢山の人手がかかり、

強風や高波の時危険で使えないことがありました。

第3幕



時は江戸時代のまっただ中、黒船事件後、鎖国をやめた日本はアメリカへ貿易の話をするため役人（使節団）を派遣。役人達は蒸気機関車を見て腰を抜かすほど驚きました！時代は明治となり、西洋文化を沢山とり入れた文明開化を迎えました。明治5年に、新橋-横浜間に日本最初の鉄道が開通し蒸気機関車はたちまちみんなの人気者になりました。【赤石君】

「ひまわりちゃんこの蒸気機関車が新橋-横浜間を最初に走ったイギリス製の1号機関車だよ」

【ひまわり】「みんなも知っているC61やD51と比べると随分小さいわね」

第8幕



昭和12年、日本と中国との間に日中戦争が16年には真珠湾攻撃で米国、英国、仏国らと太平洋戦争が始まり日本中で軍事色が濃くなったのです。それから終戦までは、日の丸の旗を振って招集された「出征兵士」を送り出す“バンザーイ、バンザーイ”の歓呼の声が伊勢崎駅にこだましていました。しかし、元気な声の陰には戦争で死んだ兵士を涙で迎える「英霊迎え」に来る悲しい家族の姿もあったのです。

17年には織物生産も統制され軍需工場へと転換させられていったのでした。駅の使われ方も街の様子も一変しました。

第9幕



昭和20年8月15日、日本は戦争に負けました。伊勢崎は、終戦前日の8月14日に、アメリカ軍のB29爆撃機により焼夷弾などの爆撃を受けました。死者29人、重軽傷者150余人、家を焼かれた人、およそ8千数百人が被害を受けました。奇跡的に戦火を免れた伊勢崎駅には戦争から帰ってきた多くの兵隊さんの姿がありました。その人達の目に映った故郷は、焼け野原となった伊勢崎の街でした。

駅前や街のあちこちに戦争で怪我をし、働けなくなった兵隊さんが楽器を演奏したりして助けを求める姿もありました。

第10幕



昭和20年代後半は、戦後の復興期を迎え、駅がとてもにぎわいたした。駅前には大きなアーチが建ち、駅に来た人達の気分を盛り上げていました。通勤通学時には、沢山の乗客でにぎわい駅から「新婚旅行」に出かける人の姿も目立ちました。駅前広場は、沢山のバスが前橋、大間々、桐生、太田、本庄など行きかい、バスターミナルとしても繁栄しました。駅前にあった柳の木や六角形の電話ボックスは、待ち合わせの思い出の場所で、昔を知る人達の心の風景として今も残っています。

ち合わせの思い出の場所で、昔を知る人達の心の風景として今も残っています。

第11幕



昭和40年頃まで子供達には、蒸気機関車が引っ張る貨車を数える遊びがありました。何両もの貨車を引っ張っている力強いその姿は、子供達の憧れだったのです。両毛線の全線電化は43年で石炭から電気へと一つの時代の移り変わりでした。一日1600人程度の乗客数が、電化した事で列車の本数も増えおよそ2200人と1.5倍に増えました。ところが56年、両毛線の貨物輸送が終わってしまった

のです。ちょうど、荷物の輸送が船から鉄道に移ったように鉄道からトラックへと時代が移っていったのです。

第12幕



平成22年5月30日、人や車が踏切で待たなくてすむように、新しい2階建ての平成駅舎が営業を始め、同時に駅北口もオープンしました。北口は、赤城、榛名、妙義をイメージしてデザインされています。

第13幕



町じゅうの人が今か今かと待ち望んでいました。これを記念して両毛線の出発式が華々しく行われました。二代目の伊勢崎駅舎から三代目の駅舎にバトンが渡され、伊勢崎がますます繁栄する事を願いました。

みんなもこれからもっともっと、伊勢崎駅を応援してくださいネ！

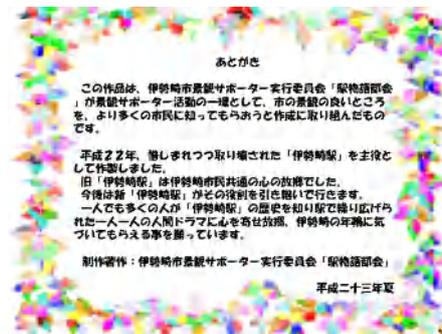
第14幕



駅南口のデザインはただいま取り組み中です（平成23年7月）。きっと北口と同じように素敵なものになるのでしょうか。両毛線と東武線をつなげる工事と駅周辺の工事も、日一日と進んでもうすぐすばらしい駅舎が姿を現してくれると思います。今からワクワクしてきますネ。織物業でにぎわった明治駅舎。太平洋戦争の戦火をくぐり抜けた昭和駅舎。3代目の平成駅舎は、どんな伊勢崎をもたらしてくれるのでしょうか。

【おわり】

あとがき



この作品は、伊勢崎市景観サポーター実行委員会「駅物語部会」が景観サポーター活動の一環として、市の景観の良いところを、より多くの市民に知ってもらおうと作成に取り組んだものです。平成22年、惜しまれつつ取り壊された「伊勢崎駅」を主役として制作しました。旧「伊勢崎駅」は伊勢崎市民共通の心の故郷でした。今後は新「伊勢崎駅」がその役割を引き継いで行きます。一人でも多くの人々が「伊勢崎駅」の歴史を知り駅で繰り広げられた一人一人の人間ド

ラマに心を寄せ故郷、伊勢崎の年輪に気づいてもらえる事を祈念しています。

制作著作：伊勢崎市景観サポーター実行委員会「駅物語部会」

平成二十三年夏

星野 正明 / 重田 泰嗣 / 和佐田富士江 / 佐藤 好彦